

## 愛の源について

岡田 雅勝

### はじめに

〈愛〉と〈倫理〉〈はじめに言葉があった〉(ヨハネ福音書)、〈はじめに行為があった〉(フアウスト)などと言われているが、それと並んで〈はじめに愛があった〉(ジュリア・クリスティヴァ)ということも〈人間の何か〉を理解するのに欠かすことができない。人間の存在はすべてからく有限である。しかし人間は何かをするにあたって、選択的な行為をせざるをえないようになって、そこに〈人間の自由〉があると言われている。人間の自由という言葉ほどこれまでにいろいろと解釈された言葉がない。しかし自由という言葉を如何に解釈しても、真の自由ということとはありえない行為である。真の自由というのは文字通りの自由で、完全な意味において自由である。その意味で、人間は自由を如何に願っても自由はあり得ないことになる。真の自由という意味で人間の自由がないとするなら、自由という言葉は少なくとも人間が行為をするときに選択的な行為をすると言えば、自由の意味がはっきりとしてくる。

人間はどんな行為をするしても結局は自分の選択的行為をする。それゆえ、人間のどの行為も自分の責任においてすることになる。誰か命じられたから、〈〜〉をしたのだと言っても、結局自分で行為したことになる。その意味で、人間の自由がある。自由という言葉はこのぐらいに抑えておきたい。だから、自由には制限があることになる。この制限のなかで、人間を制約しているのは、時間である。人間が時間の制約のただなかにおかれている。人間は時間枠を取り外すことができない。人間が有限であると言われるが、人間が生きている限りこのようにして時間の制約を受けざるをえないのである。したがって、〈自由〉は時間の制約におかれ、そのなかでの選択的行為に名付けられたものと言えよう。

また〈はじめに言葉があった〉と言うように、人間は言葉によって規制されている。言葉というとき、人間は特定の言葉を話すという意味ばかりではなく、知的な活動をする存在であるという意味で解釈して欲しい。その意味で、〈人間は言葉の存在〉でもあり、言葉の存在であるというのは、知性の存在であることを意味する。以上のことから、人間の本質に尋ねて、これ

まで人間は自由であり知的であるという答えがなされてきた。人間が一体何を求めているのか。人間は実にさまざまなことをしているが、そのどの行為も究極に愛の行為であるというのがこの小論の答えである。その意味で、〈はじめに愛がある〉という言葉は人間が愛なしでは生きれないことを意味する。人間の「一見愛がないようにみえる」どの行為にも愛が伴っている。

人間が活着ていることは愛の行為に駆り立てられている。愛のない行為は考えられえない。人間が活着ていることは、愛の行為をし、愛に根ざしている。いや、生き物は最初から愛するようになっている。この愛が人間のいう愛とは異なっているようにも愛の行為である。たとえば、カルガモの行為だって、愛に生きる行為である。しかし動物の場合、本能的に愛に活着ている。それに較べて人間の愛はもっともっと複雑である。人間は〈自由な存在〉であり〈知的な存在〉であり、それだけ一層人間の〈愛の行為〉は複雑である。パスカルは「人は愛なしに、一時でも生きることとはできない」と述べているように、人間は愛なしには活着てはいけない。愛なしに活着ていくことができないにもかかわらず、人間は、愛をとり違いたり、愛を失ってしまったり、自ら愛を破壊してしまったりして、自ら孤独になってしまい、自暴自棄の生を送ったり、失意の生を送ってしまいがちになる。

愛はなぜこうも複雑なのか。人には自由があるが、愛も〈自由〉の問題に絡んでくる。人間の自由の行使には、さまざまな挫折がつきまとう。愛も自由の行使の一つであり、その意味でまた挫折が伴う。挫折が伴うどころか現実において愛の成就がなかなか叶わない行為である。それでも私たちは愛することを止めない。愛に破れ、破れても愛することを止めないのが人間である。少なくとも愛は人間に残された唯一の生きる目的である。愛は愛するという現実の形を取らなくとも（具体的に愛する対象がないとしても）、心に愛するものをなくさない限り、人間は愛することを忘れない。そのぐらゐ愛は、人間のなかに住みついている。愛は複雑ではあるが、人間にとって欠かすことができない。すっかり愛を失ってしまった人間は想像できない。

また人間が自由である以上、その自由の行使もおよそ善悪にかかわりなくなされる。それでも人間が倫理的なものな生き方を要請され、どうしても〈倫理的存在〉であることが要求される。それゆゑに、本来人間の自由の行使は善なるもの、正義なるものといった行為が望ましいとされ、人類の福祉に反しない行為が求められてきたのであった。愛の行為も同じようにみえる。愛の行為にも善悪の問題が絡んでくるようにみえる。

人間が活着ることとは、結局は愛に安らいだ生を求めている。人間は活着ている限り、何かに希望を託し生きる。しかし人間は愛を求めて生きるなのであるが、その行為はさまざまである。つまりその行為の結末はさまざまであり、大抵の場合、愛は安ぎに終わらない。そして人々は、世をはかなみ、自らの命を断つ行為をし、人を憎んだりするが、そのどれもが全て愛に関わっている。愛の問題は、人間の生活全体に及んでいる。人間は活着いる限りよりよい生活を求めて活着ているが、活着ている間は、善悪に関わって活着ている。しかし善悪に関わり活着てい

る間は、人間はどうしても窮屈さを感じてしまう。この窮屈さを払いのけるのが愛であるように思われる。そんな意味において、愛は実のところ善悪を越えている。そうすると、愛は本当ところ倫理がいらぬ生である。愛に倫理が絡んでくるのは、それが愛ではなく、愛をめぐる倫理的な生き方を問題にしているからである。よく人は愛の悲劇について語るが、それは愛の誤解がもとになっている。本当に愛があれば、悲劇もないし、また倫理も必要でもないのである。それゆえ、愛は〈最高の価値〉と言えよう。

愛とは何だろうか。それに答えるためにために、まず愛の〈原初的な形態〉に触れてみたい。それはギリシア人が長い間、慣習として守ってきた〈愛の倫理〉があった。それが人と人との愛を説いたものである。〈フィリアの愛〉と呼ばれる愛である。それから始めたい。

## 一 フィリアの愛

幸福と愛 価値についてであるが、倫理的価値についての最初の著作として最初に形を整えたのはアリストテレスの『倫理学』<sup>1)</sup>であった。アリストテレス研究家のディルマイヤーはその本を〈ギリシヤ的伝統の貯水池〉であると指摘しているように、それには古代ギリシヤ人の生き方の智慧が伝承されている。<sup>2)</sup>彼はギリシヤ人が伝統的に〈よき生き方〉として是認してきたものに倫理の基本をみたのであった。彼の基本的な倫理的主張は、〈最高善〉を目的としてそれを実現することにあつた。

彼はそのために幸福を考えたのである。<sup>3)</sup>〈幸福〉(エウダイモニア)というのは、〈よく生きていること〉(エウ・プラッティン)と同じ意味をもつ言葉である。人間の行為は、〈よきこと〉を求めることにあるが、人が望む〈よきこと〉はたんに恣意的であつて、それが本当の〈よきこと〉であると限らず、たんに〈仮象の善〉であるかも知れない。<sup>4)</sup>それゆえ、個人が勝手に〈よきこと〉と思われることではなく、共同体(ポリス)にとつても〈よきこと〉行為でなければならない。個人にとつての〈善〉と共同体にとつての〈善〉が同一でなければならない。<sup>5)</sup>これがアリストテレスの言う〈最高善〉である。<sup>6)</sup>最高善とは個人と共同体との一致する善である。

註1、Dirlmeir, Aristoteles Nikomachische Ethik, 1956, Akademie Verlag, Berlin, s.245-255. EN = Ethica Nicomacheaを表し、textstとしてAristoteles Opera, 5Bde, 1831-70, Berlinを用いた。なお「アリストテレス全集」17巻、出隆他訳、1968-1973年、岩波書店を利用した。

註2、EN, I, 1, 1094a 2-3、註3、EN, I, 4, 1095a 16-20、註4、EN, I, 2, 1094a25、註5、EN, I, 2, 1094a27、註6、EN, I, 7, 1097a 33-34。

彼が〈最高善は幸福である〉という場合、彼は幸福の状態を〈自足した状態〉というが、各人の〈自足した〉状態だけでは〈幸福〉とは言われない。〈自足する〉というのは、個人が足りるというのではなく、家族や友人や共同体の人々と共に自分が自足するというのである。<sup>7)</sup>こうした意味での自足の行為が幸福である。アリストテレスの倫理の基本的基盤は、共同体であり、

人々との間にあって〈よい生き方〉が求められている。<sup>8)</sup> 人々が〈よい生き方〉をしなければ、社会全体がうまく機能していかないし、幸福な生活はあり得ないというのである。したがって、〈よい生き方〉が〈幸福な生き方〉<sup>9)</sup>であり、〈幸福〉こそ、〈最も善きもの、最も美しいもの、最も快適なもの〉<sup>10)</sup>である。デロスの神殿には、〈最も美しいものは、最も正しいもの、最も善いものは健康なこと、しかも最も快適なものは自分自身が愛するものを手に入れると言うのか自然の定め〉と碑銘に書かれていること<sup>11)</sup>を引き合いにして、アリストテレスはこうしたことを目的とするどの行為も〈最高善〉を目的とする行為であると強調している。

註7、EN、III、4、1113a15ff、註8、EN、I、4、1095a17-20、註9、EN、VI、13、1144b 30-32、註10、C.M. Bowra, Greek Experience, Mentor Book. 1964, p103、註11、Ibid, pp.104-105.

**愛の三つの種類** 愛(フィリア)は最も善きものの行為の一つである。<sup>12)</sup> 愛は人間の本性に根ざし、人間に備わった徳(アレーテ)<sup>13)</sup>であり、人間にとって必要不可欠である。それゆえ、愛は人間が求める究極の価値である。<sup>14)</sup> 彼の述べる愛(フィリア)は、一般に理解されているように、たんなる〈友愛〉ではない。〈親子の愛〉〈友人の愛〉〈上下の愛〉〈夫婦の愛〉〈仲間の愛〉などが含まれている。<sup>15)</sup>

ここでアリストテレスに従って、愛(フィリア)の何かについて触れたい。

一 愛は〈愛されるもの〉、つまり〈愛されるのに値するもの〉を対象としている。それには、〈善きもの〉〈快適なもの〉〈有用なもの〉がある。<sup>16)</sup>

二 愛は〈互いに相手に対して抱く好意〉である。その〈行為を相手方が気づいている〉という条件が満たされているときに成立している。したがって、愛は人と人との間に成り立つ〈相互応報的な行為〉である。無生物への愛(例えば、酒を愛するといった人間以外なものへの愛)は〈フィリア〉とは言わない。そうしたものへの愛は〈もの〉とか〈事柄〉への愛着に過ぎない。相手からの応答がないからである。<sup>17)</sup>

三 さらに愛は互いに相手に対して好意を抱き、相手のために〈善きこと〉を願い、それが相手に理解されていることである。したがって、片思いとか、自己中心的な好意は〈フィリア〉には入らない。相手のために〈よきこと〉を願うのは、相手の好意が〈よき好意〉ではない場合を厳しく批判することを意味する。<sup>18)</sup>

以上のように、アリストテレスの愛の分析によれば、愛には益(有用)、快、善と三つに分けられる。どの愛にもこれら三つの要素があるが、それらは本質的なものと付随的なものとに分けられる。<sup>19)</sup>

**益(有用)の愛について** 益の愛はどの愛にも付随するが、それだけの愛は利害だけで成り立っているので、長続きはしない。この関係は相手の人間を愛しているのではなく、利益を〈よきこと〉として、互いに利益がある限り交際しているにすぎないからである。彼らは本当に友人ではなく、互いに相手を利益を産む手段としているからである。それゆえ、益(有用)でな

ければ愛しあうことを止める。こうした愛は本当の意味においてフィリヤの愛ではない。<sup>20)</sup>

快の愛について 快の愛についても同様である。益の愛が続くのは快が得られているからであり、快はまた〈善の愛〉にもつきまとう。しかし快だけで結ばれた愛、例えば容姿の美しさに惹かれた交わりとか、肉欲の耽溺は真の快の愛ではない。肉欲の耽溺は真の快の愛ではない。情欲は時の経緯と共に移つろいゆくもので持続はしない。それは相手自身を愛したのではなく、相手の肉體の美に自分が快になることを欲望したのである。この愛もまたフィリヤの愛ではない。<sup>21)</sup>

註12、EN、VIII、1、註13、EN、1155a16、21、註14、EN、1155a4、29、註14、EN、1155a26-27、註15、アリストテレスによれば、愛を友愛に限っていないしと、男同士の愛を語っているのでない。EN、VIII、12、註16、EN、VIII、2、1156a3-5、註17、EN、1155b27-31、註18、EN、IX、8、1168b31-32、註19、EN、VIII、3、1156a12-14、註20、EN、VIII、1156a17-21、註21、EN、VIII、1156a14-16、VIII、1157a14-16。

**フィリアの愛** 益の愛も快の愛も本当のフィリヤの愛ではない。これらの愛は利益の快楽を与えてくれる限りでの交際でしかない。〈よき人とよき人〉との間の交わりではないからである。<sup>22)</sup>ただそれらが愛と言われるのは、それらの愛が〈よきこと〉そのものではないが、何か〈よきこと〉があり、〈よきこと〉に類似しているからである。フィリアの愛は、互いに相手の〈よきこと〉を願い、それぞれが自分の〈アレーテ〉(卓越性)を発揮して、〈よきこと〉になりきっているため、その愛が持続し、互いに最良の関係にあるからである。また彼らは互いに相手を受愛し、互いに結ばれているため、それだけ希有であり、最善である。

またアリストテレスは〈フィリア〉の愛の本質を受動性でなく、能動性にみている。<sup>23)</sup>つまり〈愛されること〉よりも〈愛すること〉に愛の本来の姿をみている。彼が引き合いに出す例として〈母親の子供に対する愛〉がある。母親の愛は子供に愛されるから愛するのではない。端的におのずから自分の子を受愛することを喜びとしていることから成り立っている。アリストテレスはこうした愛の営みにフィリアの愛の端緒をみている。しかしすべての親と子がこのような関係にあるわけではない。自分の子を捨てたり、他人へ預けたりする人たちもいる。そうした親には愛がない。それゆえ、親子にフィリアの愛の端緒があるとしても、親子の関係があれば親子の愛があるとは限らない。<sup>24)</sup>

註22、EN、VIII、3、1156b7-8、註23、EN、VIII、1168a20、註24、EN、VIII、12

アリストテレスはフィリアの愛の成立の条件として〈愛する人〉(フィロス)は次の規定を満たさなければならない。<sup>25)</sup>

- 1) 相手のためによきことを願い、それを実行する人
- 2) 相手が存在してくれ、生きてくれることを願う人
- 3) 相手と共に生活し、相手と考えを同じくする人

4) 相手と悩みや喜びを共にする人。

これらの規定は通常の親子の愛にみられ、〈よきひとたち〉の間でなされている。〈よきひとたち〉にあっては、こうしたことがなされている。アリストテレスはつぎのように述べている。<sup>26)</sup>

- 1) 〈よきひと〉は〈よきこと〉を自分に対して、〈よきもの〉を願い、〈よきこと〉のために労を厭わず実行する。
- 2) 〈よきひと〉は自分が生存し、それを保持させることを願う。〈よきひと〉が存在することは〈よいこと〉であるからである。
- 3) 〈よきひと〉は自分と共に時を過ごすことを願う。そのことが快であるからである。というのも、彼が過去において為した記憶は喜ばしい記憶であるし、将来への期待はよきもの、快適的なものであるからであるし、また彼の知性の構想のための材料に事欠かないからである。
- 4) 〈よきひと〉は自分と苦悩と喜びを共にする。同じことが苦悩とも喜びともなるからである。

〈よきひと〉は相手に対する態度と自分に対する態度が同じである。〈よきひと〉は自分自身に対してもつ関係を相手に対してもち、それを実行する人である。

それに対して〈劣悪な人々〉はそのような関係をもたない。つまり

- 1) 自分に〈よいこと〉と思われることよりも害悪となる快楽を選ぶ。彼らは自分に〈よい〉と思われることを臆病と怠惰なゆえに実行しない。
- 2) 忌まわしいことや邪悪なことをしているので、人々に忌み嫌われる。それゆえ、生きることを逃避したり抹殺さえする。
- 3) 独りでおれば、自分の忌まわしい所業を思い起こし、将来もそうすることが予想されるので、自分を避け。気晴らしに身を委ね自分を忘れようとする。
- 4) 愛するものをもっていないゆえ、自分を愛しないし、自分と苦悩や喜びを共にすることができない。彼らの魂は内部分裂している。あれこれと欲望し、後悔の念に充ちている。

〈劣悪な人々〉は〈愛されるのに値するもの〉を何一つもっていないゆえに、自分に対して愛の関係をもち得ない。彼らは自分の存在を自ら否定するような欲望に駆り立てられ、自分自身の同一性を保持できない人たちである。〈フィリア〉の愛にはまず自己同一性が保持されている。それが〈愛する〉という能動的な行為となってあらわれてくる。この能動性による愛の確立によって、自分への愛と他人への愛との共感が成り立つ。その意味で、〈フィリア〉の愛は、〈よきもの〉の自己愛と〈よきもの〉同士の隣人愛との一致のうえに成り立っている。それゆえ、愛は共同体のうえに成り立っている。<sup>27)</sup>

註 25、EN、IX、4、1166a 1-8、註 26、EN、IX、9、1170b 5-7、EN、IX、9、1166b 11-19、註 27、EN、IX、91169b 16-19。

**愛—最高の価値** アリストテレスに従えば、正義が実現されていても人間には愛が必要であるが、互いに友人関係にある人々には、つまり〈よき愛〉に結ばれている人々には正義は必要とされない。〈最高の正義は愛の性質を帯びている〉〈愛は正義よりもよりよいもの〉<sup>28)</sup>と述べているが、これらの表現は愛が人間の生において最も究極的な価値であることの強調である。

共同体の秩序は正義によって保たれている。正義は通常法を遵守することを意味する。法に違反した行為は不正と言われる。しかし法は人々の一般的な行為についての指針を示したもので、人々の内面まで規定することができない。現代の法哲学者ロールズ (Rawls) は正義の中心観念として〈公正さ〉をあげている。<sup>29)</sup>

〈公正さ〉とは、あらゆる人々に〈有用なこと〉〈平等〉な機会が均等に与えられ、その行使がなされることを意味する。それは外的に正当な分け前を受け、他人によって不当な侵入や危害を受けないことを意味する。社会生活はこうした法的正義によって秩序が保たれている。アリストテレスに従えば、法的正義は、法に叶うことが正しいのであり、法は人々が平等に生活できるように役立てること、つまり共同体で共に生きる人々の幸福のために、法によって保証することである。人々はそれぞれ欲望をもって生き、社会生活ではその利害関係が争われるが、法的正義とは、こうした人々の利害関係を平等にし、しかも公正に分配することに狙いがある。

〈愛があれば正義はいらない〉〈愛がなければ正義は何ものでもない〉というように、愛が正義にまさるのは、愛は本来利害関係において結ばれた関係ではないからである。正義が必要なのは、共同体での〈よき生活〉を共に営むためであって、もし〈愛〉が共同体において成立していれば、正義は必要とされない。その意味で、〈愛〉は共同体の成員の交わりの最高の価値である。アリストテレスによれば、〈人間は共同体の存在であり、その本質は共に生きる存在である〉。<sup>30)</sup> 共に生きるということは、私たちとして生きることであり、そのために互いにその存在が肯定されなければならない。

ところで、人間はたんに精神とか身体だけではなく、身体化された精神の存在として生きる。〈愛〉が成り立つ基盤も同様である。私という個体は、その生誕からすでに共同体の存在を前提としている。したがって、〈愛〉の成り立つ基盤は共同体にある。共同体によって愛は成り立つ。人間とは、間柄の存在といわれるのも、その生が共同体を前提して成り立つのであり、愛も共同体という社会生活を抜きにしては考えられない。

註 28、EN, VIII, 1, 1155a 22-28、註 29、Rawls, A Theory of Justice

註 30、EN, IX, 9, 1169b 16-19.

**フィリアの愛と教育** フィリアの愛は正義よりも優り、人間が共同体の存在とて〈よく生きる〉ときの究極の拠り所となっている。この愛は基本的に〈よきもの〉という〈等しいもの〉同士のアレーテによる愛であり、〈よきひとたちの間〉の〈善の愛〉である。その行為は、よき

行為であり、正しい行為であり、美しい行為である。幸福とはこうした愛を成就させることである。アリストテレスは、その端緒をまず共同体における自己愛にみた。各人が自分自身が最大の友人であるが、まず相手愛するためには自分自身に向けなければならない。自己同一性を堅持し、はじめて相手を愛することができるというのである。

ところで、自己愛から他者への愛と隣人愛へもたらずことは、そうしたことが各人のなかに素質として備わっているかどうかが問題となる。愛を現実化できるためには、それは〈しつけられなければならない〉。<sup>31)</sup> 〈よき行為〉は、〈よい習慣〉〈美しい習慣〉によって、よく〈しつけられる〉ことの必要性を説いている。アリストテレスは、〈本能的愛〉〈情欲的愛〉を〈フィリアの愛〉とはみなさない。〈フィリアの愛〉は、〈よき習性〉〈よき教育〉に基礎づけられるのでなければならない。フィリアの愛は本能とか欲望とは違った方法で、〈よきこと〉をすることを望んでいるからである。〈よきこと〉をするには、〈よき習性〉をつけなければならない。〈フィリアの愛〉は共同体によって〈しつけられ〉なければならないし、そのように自ら鍛錬していかなければならない。その意味で、フィリアの愛は〈よき行為〉を望む共同体の倫理的な生き方に基づけられている。この愛は何百年というギリシヤの生活習慣に基礎をおいている。ギリシヤ人はこの愛を規範として、自分たちの愛をこのような愛にするように努力してきたのであった。

註31、EN, VIII, 1, 1155a 22-28, ibid, 1170a 32-33

## 二 エロスの愛・カリタスの愛・ペルソナの愛

**ギリシヤ神話への問い—アフロディテとエロスの誕生** フィリアの愛は、ギリシヤ人の習俗を伝えるものであり、ギリシヤ人には生きる価値の最高の善として尊ばれた。〈フィリアの愛さえあれば正義はいらない〉〈愛がなければ正義は何ものでもない〉というようにフィリアの愛は共同体が生きるための倫理であったし、このようなフィリアはまた現代でも必要なものであり、現代人の愛の倫理ともなろう。

しかしここで習俗としての愛ではなく、もっと人間の本性から出てくる愛、つまり人間の生き方をギリシヤ的な習慣という狭い範囲に止めず、人間の自然の性から語られる愛について述べたい。これにはまず神話的な見方からみるという形からはじめたい。

ヘシオドスの『テオゴニア』<sup>32)</sup>には、〈カオス、タルタロス、エロス〉などの原生的な力から〈ガイア、オケアノス、ウラノス〉などが生誕する有り様とこれらの神々による世界支配の物語が展開している。ギリシヤの神々の誕生は、全て生殖によっており、八百万の神も同じく生殖によって誕生している。こうした八百万の神々のなかで、愛は〈アフロディテ〉という神の誕生から語られている。ヘシオドスは、アフロディテの誕生を次のように語っている。<sup>33)</sup>「クロノスが父ウラノスの一物を鎌でもって刈り取り、海原に投げ捨てると、それは久しい間海原の面を漂い、その波間から白い泡が湧き立ち、そのなかで一人の乙女がうまれた」。その乙女は泡(ア



フロス)から生まれた(ゲネス)なので、アプロゲネス(aphrogenes)と名付けられた。

アフロディテの女神としてのモイラ(分け前)は「娘たちの甘いささやき、微笑みと欺瞞、甘い喜び、情愛と優美」であった。アフロディテはギリシヤの十二神に入れられた。そしてその名を欲しいままにした。このアフロディテに付きまわっているのがエロスである。エロスはカオスの後にガイアと共に生誕したと言われる古い神であり、宇宙創造に与る根源的な神である。ギリシヤ神話では、エロスは、世界創造の力の源であり、生命誕生の原生殖とされている。<sup>33)</sup>そしてあらゆるもの生誕にエロスが関わっている。ギリシヤ神話は、世界の創造物が全てエロスに関わっていると述べている。エロスこそ世界に存在するもの生誕に与り、あらゆるものがその力に与っていることを述べている。

註32、Hesiods, Theogonia に出てくるエロスの働きが描かれている。

註33、このアフロディテの生誕がギリシヤ神話において活躍する女神の誕生である。この女神の生誕に働いたのはエロスである。エロスはまさにいろいろなものの創造に関係していると言える。

**プラトニック・ラプラーエロスの行為** このエロスが形を変えて、どのように人間に関わるかを描いたのがプラトンに描かれている。プラトンの対話編に語られているエロス像が人間のエロスを求める像の原型となっているものである。<sup>34)</sup>ここでは古い神のエロスとは、対照的に若いエロスの誕生が語られている。それによれば、「アフロディテの生誕にさいして、神々が集まって祝宴を開いていたが、そこにペニア(貧乏)が残りのご馳走に与ろうとやってくる。そのとき神々の一人ポロスがやってきて神酒に酔い、庭園に入って寝込んでしまった。ペニアはポロスの子種を得ようとし、彼と交わりエロスを産んだ。エロスはその後アフロディテに仕える者となった」というのである。

エロスは、ポロスとペニアとの間に生まれたので、母親の性を受け継いでいつも「貧しい」が、その反面父親の血を受け継ぎ、「美しいもの」「よきもの」を求め、勇気があり、我武者羅で、手強い狩人で、策略を編み出す一方で、思慮分別を求めて、知を愛し求める者である。さらに神と人間との間に生まれたので、不死的でも可死的でもないとされている。ギリシヤ人にとって、神と人間を分ける唯一のメルクマールは、神が不死的であるのに、人間は可死的であるということであった。

またエロスは、それぞれ父と母の性質を受け継いで、豊かさと貧困との中間にあり、エロスは、人間の性質を受け継いでいるので、何か欠けているが、神の性質を受け継いでるのでその欠けているものを希求し、それを得ようとする。しかし中間者であるので、それを得よう努力するがそれをかちえるには大変なことであるというのである。人間の本質は何かと尋ねて、私たちは、人間は自由であり、人間は知的であると答えた。人間の人間たるゆえんは知を求めるところにある。この知を求める者がエロスである。エロスは神と人間の中間者である。このことはエロスは限りなく知を求め、飽くことなく知を求めらる者であることを意味する。

知とは尋ねられて、人間の求める知とは一体何を示すのかと問わざるをえない。プラトンはそれを真理という名で答えてきた。真理という言葉で何故答えられるかということになれば、ここでプラトンのイデア論を引き合いに出さなければならない。それでイデア論を簡単に述べるとしよう。プラトンはもともと人間がイデア界にいたのであるが、いまはスキア界（影の世界、現象界）にある。しかし人間がもっていた場所をときどき思い起こすのである。その思い起こす働きをするのがエロスである。プラトンにアナムネス（想記）という言葉があるが、それは人間がイデアの世界を思い起こし、激しい頭痛に襲われる。その働きをするのがエロスである。エロスというのは、真実に目覚めるという働きをする。したがって、エロスを恋という訳語を与えるの間違いである。エロスは真実に目覚める働きを意味する。

エロスというのはたんなる恋ではない。エロスというのは求めて止まない恋、つまり最も美しいものを求める恋という意味になる。エロスという言葉に真実に目覚めるという意味をもたせばいい。この恋心が知ということである。知は真理を求め、真理に憧憬をする。知は無限な力を有し、完全な形をしている。知は最も美しいもの、最も善きものと言える。その意味で知は真理である。その知は中間者の人間にとって現に所有することではなく、いつも憧憬するだけである。プラトンのいうエロスは神と人間との中間者である性質をすべてもつ。

パスカルが人間を中間者として規定したのであるが、それよりもすでにこのように人間を規定していたのである。ここに〈エロス〉というものが人間の行為の原点を印している。エロスを語ることによって、人間の行為の出所を語っている。つまりエロスは神と人間との中間者であると規定して、人間の行為の原点を語っている。その意味で、エロスは、訳すれば恋の意味に訳されるが、もっと深い意味をもっているのである。エロスは〈恋〉と訳してもいいが、人間の行動が全て〈恋〉を原型として成り立っていることを表している。

エロスはその意味では、エロス（愛、恋）とは〈肉体的にも精神的にも美しいもののなかでの生産〉であるとも言える。誰もそうした可能性をもち、男女の交わりによる出産には、可死的な人間の不死的な憧れが成就されている。そしてこのこと、人間ばかりではなく、全ての生命体の生殖活動も同じく不死に与ろうとする努力であり、エロスの行為は生物学的な次元で生命体からあらゆる生命体へと拡張されていく。人間にはプシュケ（魂）をもってこの探求が一層激しく求められる。そこに働くのがエロスである。これがプラトンのイデア論を根拠とした〈愛〉の形而上学が語である。プラトンのエロスは、ギリシャ神話に出てくる神々の愛欲の物語でも、ホーマーの『オデッセイ』『イリアッド』に登場する英雄たちの物語でもない、〈愛とは何か〉というテーマに取り組んだ愛の形而上学である。

註34 ここで語られるエロスは Hesiodos の語るエロスとは違ってエロスを取り扱うとき、何故人間が真理を求めるのか、それも真理を求めてやまないのかということを知り解くものとして、その手口にエロスが語られる。エロスは神と人間との中間者と語られる。中間者としての規定が人間の特性として語られる。以下この箇所についてはいちいち細かい引用を省いた。

**エロスの愛** プラトンはエロスを語ることによって、人間のすべき行為で、真に目指すべき行為は永遠の真理に与る行為であると考えた。エロスの行為は、動物の生殖行為や性衝動であっても植物の生殖行為であっても〈不死〉に与る形而上学的行為であると解した。プラトンは人間の本来の姿を精神（魂）に捉えているので、人間のエロスの行為を動物的な生殖活動を越えた精神の行為として捉えている。プラトンに従えば、魂としてのエロスの行為は、〈よき行為〉〈美しい行為〉であり、〈よきもの〉〈美しいもの〉への憧れであり、魂がかつて住んでいたイデアの世界へ回帰しようとする魂の活動である。<sup>35)</sup> プラトニック・ラブとは、まさに人々との愛の交わりを通して不死なる実在へ憧憬する魂の活動である。〈恋いは盲目なもの〉とよく言われるが、それは恋いをするを通して人々は習慣化された日常生活のその縛から開放され、永遠なものへの絆を求めることであるからである。

アリストテレスは共同体での〈よい生き方〉をフィリアに求めた。それは男女の愛、親子の愛、仲間の愛など、人々の〈よき交わり〉の在り方を示すものであった。それは人々が生きていくのに必要な究極の価値であった。それに対してプラトンのエロスは人間の内部にある魂（プシュケー）の働きとして示されている。肉体のなかに魂が閉じ込められた人間が魂の世界へ回帰しようとする魂の働きであった。アリストテレスのフィリアは現実成就されるべきだと説いているが、プラトンのエロスは現実を超えた美の実在（イデア）の世界へ憧憬として捉えられている。人間のエロスへの希求は、変わり行く自分を変わり得ないものへと憧憬していくことであり、人間精神に宿る形而上学的な志向を語っている。

エロスの精神は全ての生き物の活動にも見られるが、それは結局人間の行為全般にも見られる。科学の精神も、物を制作したり、芸術の活動などにも見られる。エロスはより完全なもの、より善いもの、より美しいものに対する憧憬である。エロスの愛は、有限なものが有限であることを何らかの形で自覚し、それを越えようとする努力でもある。エロスの愛は美的なものへの希求ではあるが、美的なものとは不可分に結ばれた善的なものである。善を愛するものは、必ず〈美的なものになる〉ことを望む。エロスはあらゆる人間的な行為を動機づける標識である。エロスの愛はどんな人間にも宿っているもので、したがってエロスの行為はまったく人間的な事象であると言える。人間が何かを求める時、その求め方を言っているようである。その代表はエロスの愛である。その意味において、フィリアの愛は共同体の習慣した〈よい〉生き方を語っているが、エロスの愛は、人間が究極的に生きるとき、生き方の原点を語っている。人間の生は何に根ざして、何処に向かって行くのか。エロスの愛は人間の行為の原点を語っており、人間が愛することをその本質としていることを語っている。エロスの愛は愛の形而上学的傾向を語っている。

註 35、イデア論として知られている。このイデア論の展開はプラトンの『テアイテトス』を参照して頂きたい。

**カリタスの愛—アガペーの愛** もう一つの愛の形がある。それはイエスの教えに基づくもので、浄められた愛であり、隣人愛である。この愛は〈許し〉を基本としており、それも絶対的な〈許し〉に基づけられる。それゆえ、この愛は特定のだけを愛の対象とはせず、愛の開放性を説く。愛の開放性を語ることによって、愛の及ぶべき範囲を語っている。この愛は、聖書のいわゆる善きサマリア人に示されている愛として語られている。<sup>36)</sup>

私たちは他人と共に生きているが、ともすれば自己中心的な生き方をしている。それだから私たちの愛も自己愛となりがちである。私たちは他人を愛することよりも自分を愛してくれることを求める。ときには、自分を愛してくれない者に対して怒りや憎しみすら抱く。しかしそうした行為は慎むべきである。愛は自分と他人との結びつきであり、他者に捧げられたものである。そのことを私たちは自覚しなければならない。そして愛はただ受動的であってならない。愛の本質を理解することである。受動的な愛は愛ではなく、広く愛が成り立つ基盤と理解しなければならない。自己愛は自分を愛してくれる人を愛するだけであり、自分を愛しない人に対し憎しみや敵意すら抱くのである。

愛は相互の働きであって、相手を理解しなければ成り立たない。そうだとすると自己愛は他者の存在を認めていないことになる。そのような愛は愛とは言えない。愛は能動的でなければならない。能動的な愛は広く〈許し〉の上に立っている。〈許し〉の上に立っているとは、愛をたんに愛しているがゆえに、愛するというのではなく、愛を本質的に考えてみるとよい。愛は受動的であってはならないし、そもそも受動的な愛は存立しえない。愛は相互に他者の存在を認め合うことから始まる。その意味で愛は他者の存在を愛すること、他者を積極的に愛することにある。このように愛の能動性を説き、積極的に他者を愛することを説くのがイエスの教えである。

他者とは親しい人とか、隣人だけではなく、全ての人間を、したがって敵をも含む。イエスの教えによれば、愛の本質は〈敵を愛する〉ことであり、自分を迫害するものへ愛を捧げることである。この愛は神への愛と同じで、〈心を尽くし精神を尽くし思いを尽くし、あなたの神を愛しなさい〉(聖書)ということに示されている。このまったき愛を他者に押し進めていくことを説くのがイエスの〈アガペーの愛〉である。人間はすべて関わりの中かで生きていて、私たちが出会う人々は自分と深い関わりにあることを自覚して愛の手を差しのべるべきだとイエスは説いている。したがって、愛はつねに努力目標であって、私たちには愛の成就是達成されないのである。

このアガペーの愛を説き、キリスト教世界において指導的役割を果たしたのは、〈アウグスティヌス〉であった。アウグスティヌスは人間のあらゆる行為を愛にみている。<sup>37)</sup> 彼は、人間が悪いこと、恥じずべきこと、姦淫、非道な行為、殺人をすることにも愛が働いていることを指摘する。そうしたことを愛するのも愛である。しかしそうしたことを愛するのは〈愛の何か〉を知らないのであり、ただ愛する方法が間違っているのである。彼は、〈愛の何か〉を知り、そ

の間違いに早く気がつき、真の愛に目覚めるべきだと説く。そうした愛は危険である。危険な愛を消滅させるのではなく、愛を浄めることである。この浄めることが〈カリタスの愛〉である。

彼はこの愛を主張する。そして彼は〈愛に値するものを愛せよ〉と主張する。この浄められた愛は神を愛すること、神への愛である。それに対してこの世の愛はクビディタス（欲望、邪悪な愛）で、情欲の愛である。私たちはどうしても現実のことを愛してしまう。その愛を浄めてなければならない。したがって、〈ある人を愛するというのは、その人のあるがままの姿を愛するのではなく、あってもらいたいものを愛する〉ことになる。愛の現実は、どうしてもクビディタスの愛が入ってしまう。クビディタスの愛はありのままの人間の姿である。それは何と汚れた愛であろうか。その汚れた愛、その情欲の愛のために、色々と争いが起こるし、私たちはその愛のために神経を措きすらしめてしまい、止まることを知らない。つまり私たちは安らぐべきを知らないのである。

こうした愛は浄められなければならない。そのためにあるべき愛が必要となる。私たちは〈神への愛〉を愛しなければならない。これが〈カリタスの愛〉である。<sup>38)</sup> 私たちが目指す愛のためにいつも努力することが課せられている。〈カリタスの愛〉へ努力はなかなか達成されることのないことがないにもかかわらず、私たちは努力しなければならない。〈カリタスの愛〉は愛の理想であり、私たちが目的としてすべき努力である。

註 36、善きサマリヤ人の例であり、これはイエスの説く愛の何かの基本を語っている。福音書を参照。

註 37、アウグスティヌスの『告白』に人間の行為について、語っているが、その行為の出所がすべて人間的な愛に出ていると述べている。

註 38、その愛が清められなければならない。この清められた愛がカリタスの愛という。この愛は神への愛を第一にしている。

**ペルソナの愛** 私たちはさまざまなものに愛着や愛の感情をもち、さまざまなものを愛している。こうした愛着や愛を本当の愛へもたらすように努力すべきであろう。そのために愛が高められ、浄められなければならない。

ところで、物への愛は愛ではなく、事柄への愛着にすぎない。相手からの応答がないからである。愛には互いの応答がある。愛は他者（相手）を支配したり、他者を自分に同化させようとするエゴイズムを捨てることである。愛は相手を真に人格者として承認し、共感と思いやりをもって交わることである。そのためまず自分自身が人格者でなければならない。愛は、こうした人格者同士の共感と思いやりの交わりであり、主体的な応答であり、応答でなければならない。この愛も現実には私たちが実現することが不可能なことであるが、そのようになることを目指す他はない。

ペルソナの愛を説いた現代の哲学者マルセルはつぎのよう語っている。<sup>39)</sup> 〈私が実存するの

は、私が自分自身を他者（相手）に対して存在するものとして、他者との関係において存在するものとして扱う場合である。ではどのようにして他者の実存を認めるのか。他者を三人称（物の存在）としてではなく、親しい汝、二人称として取り扱わなければならない。他者を人格者として尊重し、その人格者に交わることである。つまり他者と〈汝〉としてとして交わることは他者を自由な人格をもった存在として交わることである。これは一見して人間と人間との愛を触れているようであるけれども、カリタスの愛、神への愛に触れているのである。

マルセルによると、人間は根源的に〈他者へと開かれ〉〈他者を受け入れ〉〈そうすることによって自分へ近く〉。こうした他者との交わりの方が共同主体の場であり、他者と交わりは愛以外にない。開かれる〈愛〉に生きる時、真の実存が獲得される。<sup>40)</sup> この愛はすでに神が前提されている。神の愛なしにこの愛がなりたないのである。

無論〈愛〉とはペルソナと出会いであり、ペルソナとの交わりである。ペルソナとは人格という意味であり、その意味では、愛は人格と人格との真の交わり、その行為は何等の報酬も要求しない贈与である。この何等の報酬も要求しない贈与というとき、すでに神のことが前提されている。神への信仰なしにペルソナとペルソナとの出会いも成立しない。したがって、神への信仰がなければペルソナとの信仰もない。ペルソナとは、カリタスの愛によって浄められた者のことをいう。

それゆえ、報酬を要求する行為は義務からの行為であり、義務を果たす行為にすぎない。そのような行為はどうしても打算的にならざるを得ない。このような愛はこの世的な愛である。キェルケゴールによれば、実存の三段階の倫理的段階にすぎない。たえず人間は自分の行為によって悩まなければならないのである。真の愛に至る一過程にすぎない。〈愛〉は相手を一切の打算なしに端的に絶対的な信頼関係に立つのではなくてはならない。

その意味で、〈愛〉とは信じることである。〈愛〉の応答は、その意味で自由の承認のうえに成り立っている。相手の自由を真に承認し、そのうえで愛の応答をするのでなければならない。愛の応答とは、待たれるもの、与えるもの、贈られるもの出会って、それは互いの自由に基づけられている。<sup>41)</sup> この愛は魂と魂との触れあいであり、この愛は情欲の愛ではない。人間が身体をもつ限り、情欲との葛藤が続く。これを乗り越えて信じることである。この信頼感、神を愛するときに生まれる。この愛が開かれていくのは神の信仰であり、それがペルソナに目覚めて行く所にこの愛が成り立つ。この愛はイエスの説くアガペーの愛を説いている。その語り方が現代の語り方であって、この愛は究極のところイエスの精神を語っている。

註 39、Gabriel Marcel, Le mystere letre, tome II, pp.11-13

註 40、Ibid, tome I, pp.221-224

註 41、Ibid, tome I, p.224 この愛の交わりもイエスの愛を成就させることにある。したがって、伝統的にイエスの愛を成就させることを目的としている。

愛とは 古来人間は、死や病気や苦悩や、その他のさまざまな制約から開放を求め生きてきている。自由とは〈自分をさまざまに束縛するものから開放を求めることである〉。〈愛〉の境地もさまざまな制約や束縛から解きはなされることを願っている。哲学や宗教の課題も、あるいは科学や医学の課題も結局はこうした開放を求める行為である。

古代から賢者たちは、こうした開放を求めてきた。例えば、ストア学派のセネカ、快樂主義のエピクロスなどもそうである。彼らは力を尽くし、知性をもって自由の境地を見出し、さまざまな苦悩からの開放を訴えた。あるいは東洋の賢者たち、老子であれ孔子であれ、また禅であれ、彼らが説いたのは心の平静さであり、何物にも強制されない生き方であった。また仏教では解脱や慈悲を説いた。それらについて語ることも必要であろう。しかしここでは西欧の愛だけを取り扱った。

愛は人間的事象であるようにみえる。人間がいるところ至るところに愛がある。しかし愛は不可思議である。愛はいろいろな形態をとっている。愛は、場所、時によって異なった形を取っているようにみえる。そして愛は人間的事象であるようにみえる。たしかに愛は人間的事象である。

しかし愛は人間的事象であるのに、いつも人間を越えている。人間は愛の行為に駆り立てられるが、究極人間を越えたものに、つまり人間的な生を越えた所に愛を求め、安らぎを求めている。それは生きている間は、いつも愛を求めていながら、愛に終わることのない生を送っている。生きている限り安らぐことのないもの、それが愛であると言いたい。生きている限り、自由とか平等は与えられないのであるけれど、人間に自由とか平等が理念としなければ、生きていけないと同じように、人間は生きている限り安らぐことはないにも関わらず、安らぎを求めて生きている。

愛は究極のところ同じことを目指しているように思われる。これまで取り扱った〈愛〉に共通して言えることは、〈愛〉は真の自由への境地へと開放すること（安らぎへと開放すること）と言えるが、それは現実に叶わない、それは愛の理念を語っている。しかしその愛の理念がなければ、愛が成り立たない。それにもかかわらず、愛は成就されがたい。

これまでフィリアの愛、エロスの愛、カリタスの愛、そしてペルソナの愛などを語ってきた。しかしそれらは愛が人間の間で成り立とうが、神への愛として成り立とうが、愛が愛として真に成り立つのは、どうやら愛によって開かれる世界は安らぎであると言っているように思われる。しかし現実に得られる安らぎはわずかであるにすぎない。これはつぎのように言った方がいい。つまりどの安らぎ現実では成就され難い。だか愛の安らぎはどれもがつねに課題として私たちに課せられている。私たちはあるべき愛を追い求めて生きている。

愛なしの生はありえないのに、その愛がなかなか成就しない。何故愛が成就されないだろうか。それは自由が人間に成就できないと同様愛も成就されない。自由がいつも目的とされる行為であると同様愛もその理念を語っているからである。私たちはすべからず有限のなかにお

かれているからである。これまで語った愛も結局はあるべき愛を語っている。そのことは愛は人間にとって必要なものであるけれども、私たちは愛の成就を語り得ない。ここで取り上げたどの愛も努力目標として掲げられるが、愛の成就是最も難しいもの、否現実には叶わないものと言える。